How is Protagoras' Relativism Self-refuting?

Yasuhiro WAKIJO

ABSTRACT: Validity of Plato's argument against Protagoras' relativism at *Theaetetus* 171a-c has been called into question by many scholars, largely because the argument, notoriously, omits the qualifying phrase "for *x*", the phrase of vital importance to relativism. Recently Luca Castagnoli offered a valuable interpretation of the passage, according to which Plato's argument does not aim at proving the absolute falsehood of relativism, but successfully shows that it turns out to be untenable for Protagoras himself in dialectical contexts. Castagnoli is right in understanding that the crucial point of the argument is that Protagoras' opponents do not admit that relativism is "false for themselves", but insist that it is "false *simpliciter*". This, however, opens several possibilities of "proving" Protagoras' relativism to be self-refuting, possibilities of something more than a mere dialectical refutation such as Castagnoli sees in the argument. Protagoras has to admit either that *p* for *x* if and only if *p* for *x* for everyone ("the *everyone* principle"), or that *p* for *x* if and only if *p* for *x*, for *x* ("the *self* principle"). Coupled with either of the two principles, relativism can be shown to lead to a contradiction. It might not be logically impossible for Protagoras to find a way to avoid this consequence, but he would have to pay too high a price for doing so.

プロタゴラスの相対主義はいかにして自己論駁的か

脇　條　靖　弘

1　はじめに

プラトン『テアイテトス』のいわゆる第一部では、知識とは感覚であるというテアイテトス説が吟味される。最終的にテアイテトス説が否定されるに至る過程で、「万物の尺度は人間である」というプロタゴラス説に対する論駁が重要な部分を占めているが、本稿では、プロタゴラス説の自己論駁性を示す議論（171a6-c7）の成否を取り上げたい。攻撃目標となっているプロタゴラスの人間尺度説は、

MD　万物の尺度は人間である。
　　s が *p* と思いなす ↔ *s* にとって *p* [*1]

である。

自己論駁性を示す議論は、プロタゴラス説に対する「真剣な」論駁（170a-179b. 途中の172c-177c に長い脱線あり）を構成する二つの論駁のうちの一つ目の中に現われる。（二つ目の論駁は未来判断にかかわる。）一つ目の論駁は次のような段階を踏んでいる。

第一の議論　170a3-d3. すべての人が真を思いなすか、あるいは、偽を思いなす人がいるかのどちらかであるが、どちらにしても MD は否定される。
移行箇所　170d4-e6.
第二の議論　170e7-171c7. プロタゴラス自身にとってはどうなのか。
　A　他の人たちだけでなく、プロタゴラス自身も MD を信じていない場合。
　B　170e7-171c7. プロタゴラス自身は MD を信じている場合。

[*1] MD を単なる条件法ではなく、双条件法として理解する。 Cf. Burnyeat 178-9. Lee は、MD 自体は条件法、双条件法について中立的だが、秘密の教説（SD）の導入によってその双条件法的性格が確保される、と理解する（56-60）。Wedin は双条件法に否定的である（178）。

(1) 170e7-171a1. MD を信じない人の方が多い分だけ、それだけ MD は成立しない。
(2) 171a6-c7. プロタゴラス自身が MD が偽であると認めざるをえない。

本稿が扱うのは、研究者の注目が集中している第二の議論の B(2) の部分、いわゆる「精妙極まりない (konpsotaton)」議論 (171a6-c7) である。[*2] しかし、この議論が本当に MD の自己論駁性を示せているのかには従来から強い疑いがある。というのも、ソクラテスは肝心な箇所で「〜にとって」という重要な限定句なしに議論を進めているからである。ソクラテスの議論の骨子は、少なくとも表明上は次のようであるように見えるのである。

(1) MD によれば、すべての判断は真である。
(2) MD が偽であると判断する人がいる。
(3)「MD は偽である」は真である。((1),(2) より)
(4) MD は偽である。((3) より)

たとえ、この議論が妥当であったとしても、それは MD の不適切な解釈、すなわち (1) のように限定句を欠いた解釈に基づいている。正しく限定句を補った場合の議論は、

(1*) MD によれば、すべての判断は、判断するその人にとって真である。
(2) MD が偽であると判断する人がいる。
(3*)「MD は偽である」はその人にとって真である。((1*),(2) より)
(4*) MD はその人にとって偽である。((3*) より)

となるであろう。[*3] プロタゴラスはこの帰結を喜んで認めるかもしれない。このままでは、プロタゴラス説はどのように自己論駁的なのか不明である。

[*2] おそらく、「精妙極まりない」と言われているのは、自己論駁性を示すソクラテスの議論ではなく、プロタゴラス説、MD である。Cf. Castagnoli 15.
[*3] (3*) から (4*) への移行については、後述の相対的規約 Tr による。

2　Castagnoli の解釈

プロタゴラス説の自己論駁性については、多くの興味深い研究があるが、最近では Castagnoli[*4] が詳細な考察を提供している。彼はプロタゴラス説の自己論駁性を対話的に理解しようとする。この意味は後で考察するが、まず、Castagnoli の論点のいくつかを紹介する。

2.1　Castagnoli の解釈の要点

■一つの議論　第一の議論（170a3-d3）と第二の議論（170e7-171c7）は、二つの異なる議論ではなく、同じ一つの議論のわずかに異なった定式化である。第一の議論の最後のテオドロスの疑問（pôs dê）を受けて、後半の箇所でソクラテスはその議論のより明確な定式化を提出しようとするのである。

■秘密の教説　Castagnoli は、秘密の教説の感覚理論の綿密な解釈を提出し、プロタゴラス説を支えるものと考える。秘密の教説で語られる、親である目と対象は公的なものであるが、そこから生み出される双子、視覚と白さは私的なものである。この感覚理論に基づくモデルが、広く判断一般に制限なく適用されていると考えられる。

■「最も精妙な」の意味　ソクラテスは、自分の提出する議論を「最も精妙な」と形容しているのではなく、プロタゴラスの人間尺度説の持つ一つの特徴をそのように形容しているのである。[*5]

■対話の中での論駁　ソクラテスの議論は、プロタゴラス説が絶対的に偽であることを証明しようとするものではなく、その説が対話的文脈において吟味に付されるときにプロタゴラス自身にとって保持不可能になることを示すことに成功している。プロタゴラスが地面から頭を出してすぐに引っ込むのも（171d）、論駁に対してプロタゴラスが対話的な応対をすることができないことを示すのだ、と理解できる。

その他、Castagnoli の主張の特徴としては、プロタゴラス説は（Fine が主張

[*4] Luca Castagnoli, Protagoras Refuted: How Clever is Socrates' "Most Clever" Argument at Theaetetus 171a-c?, *Topoi* **23**: 3-32, 2004.

[*5] Burnyeat はソクラテスの議論を exquisite と呼ぶ（177）が、彼のテキストの訳（173）では exquisite なのは MD である。

するような）不可謬主義ではなく、相対主義であること、真理の相対主義と事実の相対主義を区別しないこと、「〜にとって」という修飾句を適宜補って読むことなどが挙げられるが、彼の論述の要は上で述べた対話的論駁という点にあると思われる。

2.2　対話的論駁

さて、Castagnoli の言う対話的文脈における論駁とはどのようなものなのか。彼はプロタゴラスとその論敵の議論を以下のように再構成している。

> Opponents: By advancing MD you say something false.
> Protagoras: I concede that this view of yours is true for you, since all men believe what is the case for them.
> Opponents: So your MD is false.
> Protagoras: I concede that it's false for you.
> Opponents: But we don't concede this to you. We don't believe that MD is false *for us*: it's false (*simpliciter*).
> Protagoras: I admit that also this belief of yours is true, for you. It's true for you that MD is not false for you, but false.

Castagnoli は言う。「このケースでは相対化は、究極的には、本人自身がそれを裏打ちすることなしに他人の信念の条件付の受容を与える一つのやり方ではなく、あからさまにそれを否定する (contradicting) やり方であろう。さらに、プロタゴラスは、何秒か前にすでに自分が言ったことを、そして、それは論敵によって受け入れられなかった (そして受け入れられないだろう) ことを彼が知っているのだが、それをわずかに異なる言い方を用いて繰り返していることになるだろう。言い替えれば、彼はたわごとを言っているだけ (merely babling) になるだろう。」(20)

たしかに、論敵との対話において、相対化の限定句を保持しつづけるのは、対話的には困難である、とは言えるかもしれない。それ以上のより厳密な自己論駁性を読み取ることはできない、というのが Castagnoli の理解であると考えられる。しかし、論敵が「プロタゴラス主義が誤りであることは、私にとってではなく、端的に真なのだ」[*6] と主張することをプロタゴラスは「論敵にとっ

[*6] 論敵の主張の表現に限定句「〜にとって」を付さないのは不備ではなく美点であることは、すでに Burnyeat が指摘している (185)。

て」真であると認める必要がある、ということがこの箇所の要点であるというCastagnoliの主張を汲み取れば、プロタゴラス説については単なる対話継続不可能性ではない自己論駁性が示せる可能性がある。以下ではそれを検討したい。

3　予備的考察

3.1　真理文－相対主義版

さて、一般にタルスキの規約Tに類する条件を満たすことが真理述語の実質的要件として認められると考えてよいであろう。絶対的真理述語の場合、通常、

絶対的真理規約 Ta　*'p'* は真である ↔ *p*

がそれである。相対的真理の場合ではおそらく、

相対的真理規約 Tr　*'p'* は *x* にとって真である ↔ *x* にとって *p*

となるであろう。実際なにかある命題 *α*「地球は丸い」があるひと *s* にとって真であったとする。すると、上の相対的規約 Tr により、

α は *s* にとって真である ↔ *s* にとって地球は丸い

であるから、

s にとって地球は丸い

が導かれる。

3.2　万人にとっての相対的真理

さて、プロタゴラス説によれば、「*α* は *s* にとって真である」、あるいは、これと等値な「*s* にとって地球は丸い」（これを *β* とする）は、ある意味で成立するはずだが、これは絶対的真理なのか。つまり、

翻訳原理　x にとって p は真である ↔ (x にとって p は真である) は真である

が成り立つのか。[*7] 相対主義の主旨からして、プロタゴラスはそれは認めないだろう。では、β が相対的真理ならば、それは誰にとって真なのか。まず、自然な対応として、

万人原理　x にとって p ↔ すべての人にとって (x にとって p)

を認めるという対応が考えられる。つまり、p が成立するならば、それは万人にとっての相対的真理である。さて、β からこの原理により、

すべての者にとって、s にとって地球は丸い

が導かれる。また、そこから普遍量化の事例として、s を含む任意の人 t について、

t にとって、s にとって地球は丸い

が導かれる。

3.3　否定と虚偽

さらに、否定と偽についての確認をしておく。相対的真理規約 Tr から、通常の論理により、

−(‘p’ は x にとって真である) ↔ −(x にとって p)

が導かれるが、ここで、相対的虚偽はこの左辺と等値であると考えることとする。[*8]

‘p’ は x にとって偽である ↔ −(‘p’ は x にとって真である).

[*7] Burnyeat はこれに相当するものを「翻訳原理」と呼び、プロタゴラスが自説を主張するのに必要だと考える (193-4)。Wedin はプロタゴラスはこれを認めないと考えている (185)。

[*8] Cf. Wedin 183.

４　万人原理による自己論駁性

ここからある種の自己論駁的議論が構成できる。まず、プロタゴラスにとって MD は真であるとしよう。（MD の内容を「万物の尺度は人間である」と表現することにする。）相対的真理規約 Tr より、

> プロタゴラスにとって、MD は真である ↔ プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である

だから、右辺と左辺の両方が成立する。どちらでもよいが、右辺の、

> プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である

と、万人原理より、

> すべての人にとって、（プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である）

が帰結する。矛盾を導くには、ある人 *s* について、

> −（*s* にとって、（プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である））

が成り立てばよい。これは、

> *s* は「プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である」と思いなさない

という状況で成立する。言うまでもなく、そのような状況では、MD により、

> −（「プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である」は *s* にとって真である）

が導けるが、そこから相対的真理規約 Tr により、−（*s* にとって、（プロタゴラスにとって、万物の尺度は人間である））が帰結するからである。さて、その

ような s が存在するだろうか。たまたま、上のような信念が欠如している人間はたくさんいるであろうし、もっと積極的に、相対主義に反対する思想を持つ人もいるだろう。

同様に、大多数の人の代表として、ソクラテスが反プロタゴラス主義を主張し、「万物の尺度は人間である」と考えなかったとしても矛盾が生じる。MD により、

−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である).

ここから、万人原理により、

すべての人にとって、−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である).

ここからある人 u について、

u にとって、−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である)

である。さて、その人 u が−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である)と思っていないという状況があるなら、矛盾が生じる。そういう状況では、MD により、

−(u にとって、−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である))

だからである。さて、そのような状況がありうるだろうか。どのような理由であれ、たまたま「−(ソクラテスにとって、万物の尺度は人間である)」という信念を欠く人、あるいは、積極的に否定する人が存在する可能性をどうして否定できるだろうか。

5　本人原理による自己論駁性

5.1　原理の修正

人間尺度説の自己論駁を導くこのような議論に対して、プロタゴラス主義者はどのように対応するだろうか。万人原理の修正が考えられる。p が x にとっ

て成立している、真であるなら、「x にとって p である」はすべての人にとって成立しているのではない、とするのである。しかし、それは少なくとも x にとって成立していると考えなくてはならないだろう。つまり、

本人原理　x にとって $p \leftrightarrow x$ にとって（x にとって p）

である。[*9]

さて、万人原理を本人原理に置き換えた場合、プロタゴラス主義は安泰となるであろうか。矛盾が生じるとすれば、x にとって、p と思えるが、（x にとって p）とは思われない、あるいは、その逆の食い違いが起こるケースである。これは一見ありそうもないケースであるように見えるが、果たしてそうか。

5.2　絶対的真理についての信念

絶対的真理を信奉する反プロタゴラス主義者が持つ信念について、プロタゴラス主義からは矛盾が生じる可能性がある。つまり、

MD は真でない

と思いなす反プロタゴラス主義者 s がいるなら、MD によれば、それはその人にとって真であり、成立する。

F　「MD は真でない」は s にとって真である。

本人原理により、

「MD は真でない」は s にとって真である」は s にとって真である

が成立するはずである。ところが、一方で s は F がその信念文になるような信念は持たない。なぜなら、彼にとって「MD は真ではない」は、彼にとって真なのではなく、端的に真だ、と考えるからである。したがって、MD により、

[*9] 本人原理は、Wedin の (10b) と同じである。しかし、Wedin の注意は、Burnyeat の示唆 (194-5) に対応して、無尽蔵に再帰的に真理文を生成することの是非に向けられていて、私の主張するような自己矛盾には触れられていない。

−(「MD は真でない」は *s* にとって真である」は *s* にとって真である)

が帰結する。これは矛盾である。

6　問題点

以上のような自己論駁性がテキスト上で主張されているのだと考えるには、処理すべき問題点がいくつかある。

6.1　テキストとの整合性

当然これは問題である。一つは、反プロタゴラス主義者の信念が「‘(*F* の内容)’とは思わない」という複雑な形をとることが問題になる。しかし、*F* は相対的真理規約 Tr、絶対的真理規約 Ta により、

s にとって、万物の尺度は人間ではない

と等値である。*s* はこれを否定し、端的に「万物の尺度は人間ではない」と主張するのである。この部分の理解は Castagnoli 解釈でも同じであろう。

6.2　自己論駁なのか

テキストでは、MD 自体についての反プロタゴラス主義者の信念が取り上げられているが、上のような矛盾を導くためには、そうである必要はないのではないか。それどころか、あらゆる信念が同じような矛盾を帰結するのではないか。たとえば、*s* が「すべての人間は死ぬ」と思いなしていたとする。MD により、

s にとって、すべての人間は死ぬ

が帰結する。これは、相対的真理規約 Tr によって、

「すべての人間は死ぬ」は *s* にとって真である

と等値である。ここから本人原理により、

「「すべての人間は死ぬ」は s にとって真である」は s にとって真である

が導かれる。ところが、もし s が反プロタゴラス主義者であって、絶対的真理の信奉者であれば、s は「すべての人間は死ぬ」は s にとって真である」とは考えない。(「すべての人間は死ぬ」は彼にとって端的に真なのである。) したがって、MD により、

「「すべての人間は死ぬ」は s にとって真である」は s にとって真ではない

が帰結する。これは矛盾である。

矛盾を導くのに必要なのは、

- 反プロタゴラス主義者が存在すること。
- その人がなんらかの信念を持つこと。

であって、その信念は MD についてのものである必要はない。この点は Castagnoli の対話的な自己論駁性でも同様であると思われる。

では、なぜわざわざ MD そのものが反プロタゴラス主義者の持つ信念としてあげられているのか。反プロタゴラス主義者が他にどのような信念を持つとしても、たしかに、反プロタゴラス主義者であるかぎり、「MD は偽である」という信念は持つはずである。これがその理由であるかもしれない。

6.3 信念の成立条件

反プロタゴラス主義者は、絶対的真理概念を含んだ信念を持つ。プロタゴラスは、人がそのような信念を持つことはありえないと主張できないだろうか。真理述語はあくまで「〜は〜にとって真」という二項述語であって、反プロタゴラス主義者の言おうとする「MD は真でない」は統語論的に不備なナンセンスであり、反プロタゴラス主義者はそのような信念を持つことすらできない、と。

しかし、上で見た一般的な自己論駁の議論に対してはこの返答は成立しないと思われる。たとえば、「すべての人間は死ぬ」と信じている人 s の、その信

念文にはすくなくとも直接には真理述語は含まれない。ここから矛盾を導くのに必要なのは、*s* が「すべての人間は死ぬ」は *s* にとって真である」という信念を持たない、ということで十分である。この信念の欠如の（心理的、因果的）由来がどうであれ（それは信念とも呼べない絶対的真理の概念の亡霊であるかもしれない）、この欠如自体は成立する。

プロタゴラス主義者は、実はこの「すべての人間は死ぬ」という信念も、絶対的真理規約 Ta により、「「すべての人間は死ぬ」は真である」と等値なのだから、暗に絶対的真理述語を含んでいる、と言うかもしれない。しかし、この応答も多くの難点を含む。まず、反プロタゴラス主義者の信念 '*p*' は暗に「'*p*' は真である」を含んでいるのに対して、プロタゴラス主義者の信念 '*p*' はそうではない、という区別を立てる必要があろう。プロタゴラス主義者の信念 '*p*' が含んでいるのは、相対的真理規約 Tr による「'*p*' は *s* にとって真 である」である、と。この区別をどのように立てるのか。そもそも信念には（同じ *p* という信念でありながら）絶対的信念と相対的信念の区別があるのだろうか。さらに、別の問題として、どうしてある信念文（「すべての人間は死ぬ」）が無意味、ナンセンスな擬似信念文（「「すべての人間は死ぬ」は真である」）と等値であるというようなことが可能であるのか。

6.4　本人原理の否定

もしかすると、プロタゴラス主義者は、万人原理だけでなく、本人原理さえ認めないかもしれない。ある人 *s* が *p* と思いなし、それゆえ（MD により）*s* にとって *p* であっても、その *s* にとって *p* ということ自体は、*s* 本人にとってさえ、かならずしも真ではない（かならずしも成立していない）とするのである。では、*s* にとって *p* は誰にとって真である（成立している）のか。

たとえば、それは「プロタゴラス主義者にとって」真である（成立している）のだとして、プロタゴラス主義者は矛盾を回避しようとするかもしれない。[*10]

[*10] この可能性については、「＜教え、学び、わかること＞の基礎的探究」研究会（註14参照）にて、青山拓央氏から指摘を受けた。

あるいは、相対主義者は、矛盾を回避するために「*x* にとって *p*」はそう思う人にとって真であるとするかもしれない。（この点については、古代哲学フォーラムで山口義久氏から指摘を受けた。註14参照。）つまり、本人原理を

信念者原理　*x* にとって *p* ↔「*x* にとって *p*」と考える者にとって（*x* にとって *p*）

に置き換えるわけである。われわれが問題としている状況、すなわち、「*p*」と考える *s* が「*s* にとって *p*」とは考えないという状況においては、MD により "*s* にとって *p*" と "*s* にとって（*s* にとって *p*）ではない" の二つが帰結する。しかし、このことは信

相対主義者原理　x にとって p ↔ プロタゴラス主義者にとって (x にとって p).

ここで、「プロタゴラス主義者」とされる者は、単なる「自称プロタゴラス主義者」では十分でないし、「プロタゴラス主義を信奉する者」でも不十分である。それは、「プロタゴラス主義が自己論駁に陥るような不都合な信念をけっして持たない者」でなければならない。たとえば、プロタゴラス主義を信奉する者でも、たまたま、(何の因果か)s にとって p と思わないという状況があれば、[*11]万人原理について見たように、たちまち矛盾が生じるからである。万人のサークルがプロタゴラス主義者のそれに縮まっただけである。矛盾を回避するためには、そのような形の定まらない「プロタゴラス主義者」の集団について上の相対主義者原理を受け入れる必要がある。[*12]

7　自己論駁の偶有性

一般に、s が p と思いなすなら、MD により、s にとって p であるが、このこと自体がある人 t にとって成立しているなら、つまり、

t にとって（s にとって p）

であるなら、t が「s にとって p」と思いなさないという状況があれば矛盾が生じる。ここまでの議論で、そのような状況が生じないことを保証するような仕方で、この t に当たる者の集団を確定するには相当の困難があることが示された。[*13]

プロタゴラス説の自己論駁性は、尺度とされる人間集団に含まれる者が、な

念者原理に反しない。プロタゴラス主義者のこの応答の可能性については、別の機会に議論したい。

[*11] たとえば、単に s が p と考えているということを知らなかった、というような状況でも。

[*12] これが相対主義の究極の形かもしれない。入不二参照。

[*13] では、そもそも「s にとって p は誰にとっても成立しない」、と考えられるだろうか。これが、どの人 t をとっても、

−(t にとって（s にとって p))

ということならば、たまたま t が（s にとって p）という信念をもつという状況でやはり矛盾が生じる。

んらかの特別な信念を（どのような理由からであれ）持つという偶有的事実に依存している。だから、MD は必然的に矛盾するとは言えない。すべての人間が、プロタゴラス主義と整合する信念だけを持つようなユートピアがあれば、MD は無矛盾で安泰かもしれない。しかし、これはすでにトートロジーに聞こえる。[*14]

■参考文献

Burnyeat, M. F., “Protagoras and Self-Refutation in Plato’s *Theaetetus*”, *Philosophical Review,* 85（1976）, 172-95, repr. in S. Everson（ed.）, *Companion to Ancient Thought, i, Epistemology*（Cambridge, 1990）, 39-59.

— *The Theaetetus of Plato*（Indianapolis, 1990）.

Castagnoli, Luca, “Protagoras Refuted: How Clever is Socrates’ “Most Clever” Argument at Theaetetus 171a-c?”, *Topoi* 23: 3-32, 2004.

Fine, G., “Plato’s Refutation of Protagoras in the *Theaetetus*”, *Apeiron* 31, 201-234, 1998.

Wedin, Michael V., “Animadversions on Burnyeat’s Theaetetus: on the Logic of the Exquisite Argument”, *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, XXXIX, 171-191, 2005.

入不二基義『相対主義の極北』春秋社 2001

[*14] 本稿は、2009年9月10日開催の山口大学研究推進体「＜教え、学び、わかること＞の基礎的探究」研究会での発表、「プラトンの『テアイテトス』の相対主義について」および、2009年9月26日開催の古代哲学フォーラム（イリソス会）第36回例会での発表「プロタゴラス説の自己論駁性について」を改訂したものである。